

# 年頭のご挨拶

公益社団法人日本金属学会 会長 掛 下 知 行

皆様、新年明けましておめでとうございます。

昨年は国内外において経済の回復の兆しが見え始めたとは言え、様々な自然災害が日本を襲い、また3年前の未曾有の大災害以来のエネルギー問題や「原発」の後処理計画に対しては、依然として復興への明確な糸口がつかめない場面も多い中で迎えた新たな年明けとなりました。本会におきましても、金属及びその関連材料の学術及び科学技術に基づいて、上述した問題を始め我が国が抱える諸問題に対して真摯に貢献できる学会活動の環境整備と若手人材育成の重要性がより一層増していると感じております。



以下に、昨年会長就任の挨拶にて紹介させていただいた本会の活動方針について、現状と課題の一端を報告させていただき、それを踏まえて本年の方針を述べさせていただきます。

まず特筆すべきこととして、公益社団法人としての新たな活動を始めたことを挙げたいと思います。公益法人制度改革関連法令が2006年6月2日に公布され、以降歴代の本会関係者のご尽力により、本会は、2008年12月1日に特例民法法人に移行し、2012年7月31日に公益社団法人への移行認定申請を行い、昨年2013年3月1日に現法人の解散と新法人の設立をいたしました。新法人では「金属及びその関連材料の学術及び科学技術の振興に関する事業を行い、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与すること」を目的としております。昨年はセルフガバナンスによる公正かつ適切な運営によって、公益目的事業をこれまで以上に推進して参りましたが、本年も引き続きさらに力を注ぎたいと思いますので、会員の皆様方のご理解とご協力をお願いする次第です。

次に、魅力ある学会としての活動の充実に関して述べたいと思います。様々な材料の機能発現情報を得るための計測・分析機器の発展と計算科学の進展が著しいことから、理論構築への新たな展開および究極的なマテリアルデザインへの可能性に光明が射していると強く感じております。この学際的な色彩と材料科学・材料工学の未知の領域を開拓する精神を維持・発展することが、本会の特色であります。この特色が、本会の魅力であるとともに、関係学会や本会との両輪関係にある産業界、さらには若い科学者・技術者を惹きつける大切な要因であります。この特色をさらに際立たせるため、本会では、昨年、講演大会委員会で、講演大会セッションの改編の検討を推進しました。対策を合意すれば本年秋期講演大会から実施する予定です。講演大会につきましては発表件数の増加を目指して、これまでの様々な取り組みを精査し、講演大会の企画と運営にさらに工夫を重ねる必要があると思っております。学術組織としての一面をより一層魅力あるものにするために、本年は、次のステップとして、分科会のあり方について検討が深まることを期待しております。

3点目として、魅力ある学会活動の情報発信の基盤となる学術論文誌事業の強化について述べます。本会では、2012年1月から、刊行後1年が経過した論文は電子ジャーナル上でフリーアクセスを

可能とし、和文誌については昨年1月から個人の研究目的に限定してフリーアクセスを開始しました。そのため、アクセス数の増加が軌道に乗りつつあります。しかしながら、学術論文誌のインパクトファクター向上が喫緊の課題であることから、本年1月から学術論文誌の Graphical Abstract の希望掲載を開始し、欧文誌につきましてはトムソン・ロイター・プロフェッショナル社の文献引用通知サービスを開始し、時期を見て引用分析等の情報の一斉配信サービスも実施します。欧文誌は、公開流通性をより一層高め、さらにレベルの高い論文を収録し、高い評価が得られるような地道な努力が必要であると痛感しておりますので、皆様のさらなるご尽力を期待しております。

4点目として、国内外の学協会との連携活動について述べたいと思います。国内活動として、本会は、日本鉄鋼協会との連携を根幹に材料系学協会との連携によって材料連合協議会、材料戦略委員会、欧文誌共同刊行編集委員会などの活動を行ってまいりました。本年も継続して注力します。国外連携活動では、2国間交流として大韓金属・材料学会(KIM)とのKIM/JIM Joint Symposium 開催と The Minerals, Metals & Materials Society(TMS)との若手研究者(Young Leader)交換派遣を継続します。また、材料分野の国際連携組織である IOMMMS との連携事業として、材料啓発活動に貢献した学生を顕彰する World Materials Day Award も継続します。さらに、環太平洋地区での連携として、昨年は8月にハワイで開催した TMS 主催の PRICM8(The 8th Pacific Rim International Conference on Advanced Materials and Processing)に共催参加しました。2016年の PRICM9 は本会が主催し京都で開催する予定です。本会の存在感をより一層高める絶好の機会でもあり、本年はその準備を推進しますので、会員の皆様方のご協力を切にお願いする次第であります。

5点目に、本会に関わる各省庁等の施策への対応について述べたいと思います。総合科学技術会議において2011~2015年の5ヶ年間に第4期科学技術基本計画が推進されています。また科学技術イノベーション総合戦略が推進され、将来にわたる持続的な成長と社会の発展の実現のための様々な大型プロジェクトが文科省、経産省等で策定・推進されています。材料工学分野では材料系学協会連携の材料戦略委員会で対応を推進しており、一昨年から本会が世話学会となって活動を進めてまいりました。この材料戦略活動は、科学技術分野における材料科学・材料工学のより一層の発展のためには極めて重要であり、材料を扱う学協会の連携意識を深めて、将来的には材料系の連携体組織の構築への道を拓くものと期待します。

6点目に、これからの金属およびその関連材料学の将来を考えるには、大学生の育成のみならず、その候補者となる中高生を、この金属およびその関連材料学の分野に引き入れるための魅力創りも不可欠です。中高生を対象とした冊子やパンフレットの刊行や Web 上での情報発信等、将来を担う若者たちへの金属及びその関連材料学の重要さと面白さを伝えるための活動を関連学会と一致団結して推進することも大変大切な課題であると思っておりますので、皆様のご理解とご協力を切にお願いいたします。

最後になりましたが、会員各位のご健勝と益々のご発展を祈念し、年頭の挨拶とさせていただきます。

2014年1月